九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Clinical and Prognostic Significance of the Epithelial-Mesenchymal Transition in Stage IA Lung Adenocarcinoma: A Propensity Score-Matched Analysis

松原, 太一

https://doi.org/10.15017/2556288

出版情報：九州大学, 2019, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：

（別紙様式２）

氏　　名	松原　太一
論　文　名	Clinical and Prognostic Significance of the Epithelial-Mesenchymal Transition in Stage IA Lung Adenocarcinoma: A Propensity Score-Matched Analysis
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　小田　義直 副　査　　九州大学　　教授　　江藤　正俊 副　査　　九州大学　　教授　　加藤　聖子

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

上皮間葉転換(EMT)は肺癌を含む様々な癌腫で転移や予後不良と相関があることが報告されている。しかしながらIA期肺腺癌におけるEMTの意義は不明である。今回申請者らはE-cadherinとVimentinの免疫染色を行い、IA期でのEMTの意義を検討した。E-cadherin陽性かつVimentin陰性の上皮グループが105症例(57.4%)、E-cadherin陽性かつVimentin陽性もしくはE-cadherin陰性かつVimentin陰性の中間グループが64症例(34.9%)、E-cadherin陰性かつVimentin陽性の間葉グループが14症例(7.7%)であった。間葉グループおよび中間グループをEMTと定義した。EMTを起こした腫瘍は高齢者に多く認められ、有意に術前CTでの浸潤径/全腫瘍径比が高かった。生存解析を行うにあたり、プロペンシティスコアを用いて2群間の患者背景のバランスを整えた。EMTを起こした腫瘍は有意に予後不良であり、無再発生存において独立した予後不良因子となった。以上のことから、IA期肺腺癌においてもEMTは予後不良因子であった。

以上の結果はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々の質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。
よって調査委員会合議の結果、試験は合格と決定した。